

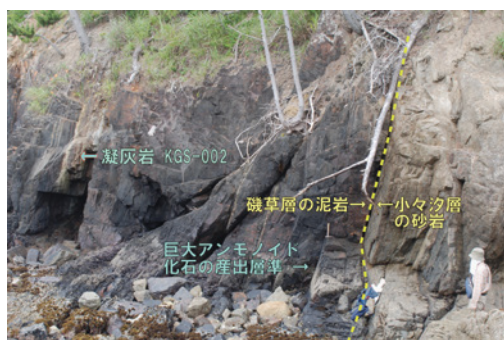
mnividens

【オムニヴィデンス】



小々汐層と磯草層の境界

大潮の干潮時にのみ露出する磯草上部の泥岩層



気仙沼大島産アンモナイト化石の年代を特定

気仙沼大島の若木浜では大潮の干潮時に鹿折層群最上部の磯草層の泥岩層が約 100 m にわたって連続的に露出します。泥岩層の安定炭素同位体比測定と泥岩に挟まれる火山灰層中のジルコン年代測定をおこなった結果、前期白亜紀に起きた地球規模の環境変動「ワイザート事変」が磯草層中に記録されていること、磯草層最下部産の日本最大級アンモナイト化石（本紙 No. 69）の年代が前期白亜紀バランジニアン期であることが明らかになりました（本紙 4～5 ページに関連記事）。

（写真上）若木浜に露出する小々汐層砂岩とそれを覆う磯草層泥岩（写真左）小々汐層と磯草層の境界部、巨大アンモナイトの産出層準および年代測定をおこなった凝灰岩層（KGS-002）（永広昌之）

2026.7
NO.

75

藤澤 敦 総合学術博物館教授の最終講義「境と際の考古学」が開催されました

はじめに

2026年3月7日（土）、東北大学片平キャンパスの片平さくらホールにおいて「境と際の考古学」と題した藤澤敦教授の最終講義が開催されました（写真1）。まだ冷たい空気が残る季節、会場には教職員や学生、卒業生、地域の関係者が数多く集まり、開演前から熱気が満ちていました（写真2）。埋蔵文化財調査室の菅野智則特任准教授が司会をつとめ、総合学術博物館の高嶋礼詩館長による挨拶を経て、穏やかな拍手の中で講義が始まりました。

前半：1. 古墳調査との出会い

講義前半では藤澤教授の研究半生が、後半では現在取り組んでおられる研究の核心が語られました。藤澤教授は1961年京都に生まれ、本格的な考古学調査を経験したのは1979年3月、高校生活が終わりを迎えた頃に参加した長岡京右京第12次調査でした。高橋美久二氏、奥村清一郎氏らの指導のもと、発掘現場の実践に触れた経験は、その後の進路を決定づける原点となったようです。

1980年に東北大学に入学してからは仙台市教育委員会による縄文遺跡などの調査に参加、1985年3月には福島県の国見八幡塚古墳の調査に参加



1. 最終講義「境と際の考古学」に登壇する藤澤敦教授

し、東北地方での初めての古墳調査に携わりました。卒業論文では裏町古墳、大野田1号墳・2号墳、経ノ塚古墳等の埴輪を対象に、原子吸光分析をもちいた理化学的手法を導入して、生産地推定と流通の実態解明に取り組みました。理学部の蟹澤聰史教授らの指導のもとでおこなわれたこの研究は、胎土中の元素組成を比較することで製作地の同定を試みるもので、考古学と自然科学の融合を体現する試みでした。これは現在の学際ハブでの研究に繋がることになりました。

その後古墳研究への邁進を心に誓うも大学には資料が乏しく、伝手を辿りながら2ストの使い込まれたカワサキに乗り、宮城県内の遺跡を巡っていたそうです。

2. 前方後円墳集成

岡山大学の近藤義郎教授を中心とする全国的前方後円墳集成研究に参加し、東北地方わけでも宮城県での調査や編年作業を担うことになりました。福島県の会津大塚山古墳を再測量し、宮城県村田町の千塚山古墳に加え、愛宕山古墳などでは、学生たちを率いて寝食を共にしながら調査にあたり、地中レーダー探査をもちいた非破壊調査なども実施しました（写真3）。なお、学生が事故に遭わないようにと願かけとして生やし始めた口ひげが現在のトレードマークとなったというエピソードも紹介され、会場には和やかな笑いが広がりました。



2. 最終講義会場にはさまざまな関係者が参集



3. 村田町の愛宕山古墳での合宿調査

1991年に東北大学助手となり、埋蔵文化財調査室に勤務し、2006年には特任助教授に就任して、大学構内遺跡の調査・記録・保存に長年携わることとなりました。川内南・川内北、青葉山、富沢といった各地区での調査は24年間にわたり継続され、出土遺物は膨大な量にのぼりました。着任時1218箱あった未整理資料は、昼夜を問わず黙々と続けた整理作業により退任時には254箱まで減少したそうですが、一方で新規出土資料は増え続け、総量としては2倍以上に拡大したようです。

3. 仙台城の調査、そして震災

1990年代後半から2000年代前半にかけての仙台城本丸北面石垣の保存修理事業では、解体修理の過程で仙台市教育委員会によって詳細な考古学的調査がおこなわれました。本丸北面石垣が3期にわたる改修の痕跡をもつことが明らかになり、また、復元を予定されていた良櫓がそこに存在しないことが示されました。この成果にもとづき、宮城県の7学会が復元に反対を表明し、最終的に櫓の復元は断念されました。考古学の公共的役割を示す重要な事例といえます（写真4）。

2011年3月の東日本大震災では南三陸町、石巻市、東松島市等において被災文化財の救出・保全活動にあたりました。瓦礫の中から文化財を掘り出し、応急処置を施す作業は、地域の歴史的記憶を未来へつなぐ営みでも

あります。2015年に柳田俊雄教授の後任として総合学術博物館教授に就任し、その経験は相次ぐ自然災害への防災・減災の提言を含めて、総合学術博物館の使命の一つとして組み込まれています。

後半：1. 境と際の考古学

講義後半では、「境界の考古学」という研究の核心が具体的なデータとともに体系的に示されました。東北地方は前方後円墳に代表される古墳文化の北限に位置すると同時に、続縄文文化の南限とも接する地域です。この二つの文化圏の接触帯において、どのような相互作用が生じたのかを解明することが藤澤教授の長年の課題でした。

まず、考古資料の分布にもとづく地域区分が提示されました（写真5）。①北海道中部・南部では古墳時代から7世紀にかけて続縄文文化が継続的に展開しているのに対し、②青森県・岩手県・秋田県では7世紀以降も古墳文化の影響を部分的に受けつつ在地的要素の強い文化様相が維持されました。古墳文化が広がっていた③の地域はさらに二つに分かれ、③-A宮城県・山形県沿岸部・新潟県東部では古墳文化と続縄文文化の要素が同時に確認され、両者の密接な関係が見られます。一方で③-B山形県内陸部から福島県会津地方にかけては続縄文文化の痕跡がほとんどみられない地域です。

藤澤教授は、遺物組成や遺構配置



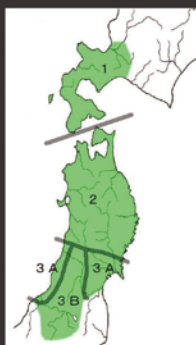
4. 仙台城本丸北面石垣の調査

の比較に加え、編年の精緻化をつうじて、こうした差異の時間的変化も検討しました。その結果、東北における古墳文化の受容は多層的で段階的な過程であったことが明らかになりました。

2. 支配の外部としての蝦夷

さらに重要なのは、こうした考古学的分布と、文献史料に現れる「蝦夷」の領域とが必ずしも一致しない点です。藤澤教授は、この不一致に着目し、「蝦夷」を多様な地域社会を含む可変的な概念として再定義する必要性を指摘しました。そして、日本古代の中央政権が支配の正統性を構築する過程で、「外部」としての蝦夷像を形成した可能性を論じました。これは考古学資料と歴史叙述との関係を再考する理論的枠組みでもあります。日本古代の中央政権は、支配の正統性を主張するために「外部」を創出する必要性に迫られ、そこに「蝦夷」という他者をつくり出したのだと藤澤教授は考えたのです。

蝦夷の多様な実態



- 1: 古墳時代から7世紀には続縄文文化が広がり、8世紀以降は擦文文化が広がる地域。＝北海道中部・南部
- 2: 古墳時代には続縄文文化が広がり、7世紀以降も東北北部の独自の様相が強い地域。＝青森県・岩手県・秋田県
- 3: 古墳時代には古墳文化が広がっており、7世紀以降も東南北部の様相に含まれる地域。
- 3A: 古墳時代に続縄文文化と密接な関係を有した地域。＝宮城県北部・中部、山形県・新潟県東半部の沿岸部
- 3B: 古墳時代に続縄文文化との関係がほとんど見られない地域。

48

周縁の歴史をどう語るか？

- ・ 10代に北米先住民の歴史を知る。
- ・ 先住民が植民者に支配されていくことは、“Manifest Destiny”「明白な運命」であったとする見方を越えることが可能か？



ディー・ブラウン（鈴木主税訳）1972『わが魂を聖地に埋めよ（上・下）アメリカ・インディアン闘争史』草思社

5. 東北地方の「蝦夷」の実態に迫る

6. 植民者による北米先住民の支配は「明白な運命」なのか？

3. 周縁の歴史をどう語るか

この問題意識の背景には10代の頃に読んだディー・ブラウン著・鈴木主税訳『わが魂を聖地に埋めよ』（1972）の影響があるといえます（写真6）。北米先住民の歴史を知り、先住民が植民者に支配されることが「明白な運命」であったとする見方を変えることができるかどうか、言い換えれば、支配される側の歴史をどのように記述するか、という問いが形成されました。

さらに、1997年から1999年度の基盤研究B「東北・九州地方における古墳文化の受容と変容に関する比較研究」では日本の南北における周縁地域を比較し、また、文化人類学の成果を参照しながら、竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』（2005）などの議論を踏まえて「民族」や「人種」という概念そのものを批判的に再検討しました。考古学的データと理論的枠組みを往還させることで、歴史的に構築され変化するものとして「境界」を捉え直し、文化的同一性よりも、差異がどのように認識されてきたかを重視する視点が提示されました。

おわりに

講義の最後で、藤澤教授は1980年の東北大学入学以来46年間にわたり同大学に在籍・在職し、学生・研究者として活動してきた年月を振り返り、指導や協力を受けた多くの方への感謝の言葉を述べられました。講義の終わりには長年のご貢献に感謝して藤澤教授に花束が贈呈されました（写真7）。

「境」と「際」に目を向けるという視点は、過去の社会を理解する方法であると同時に、現代における他者認識

のあり方を問い直すものでもあります。朗々とした語りの余韻が残る会場を後にするとき、聴衆の胸には、各々の立場からこの問いに向き合おうとする思索の心が芽生えていたように感じられました。

藤澤敦教授は、ご定年後も特任教授として総合学術博物館および金属材料研究所において引き続きご活躍される予定です。

（文・写真・構成＝小川知幸／
資料提供＝藤澤 敦）



7. 最終講義の終わりには藤澤敦教授に感謝の花束が贈呈されました

日本最大級の気仙沼大島産アンモノイド化石の年代が判明しました

2026年5月、高嶋館長らの研究グループによる研究成果が国際学術雑誌 *Cretaceous Research* に掲載されました。

本研究では、泥岩に含まれる炭素の同位体の割合（安定炭素同位体比）を調べる方法と、火山灰に含まれる鉱物ジルコンの年代をウラン—鉛法で測定する方法をもちいて、気仙沼大島に分布する前期白亜紀の地層（唐桑層群最上部・大島層群）の詳しい年代を明らかにしました。さらに、前期白亜紀に起きた「ワイザート事変」と呼ばれる地球規模の環境変動が、炭素同位体比の正のエクスカッションとして気仙沼の地層にも記録されていることを示しました。ワイザート事変とは、現在の南米とアフリカにあたる地域での大規模な

火山活動によって引き起こされた、急激な地球温暖化と気候変動のことです。

また、気仙沼大島の若木浜で1967

年に発見された当館所蔵の日本最大級のアンモノイド化石は、これまでジュラ紀後期のものと考えられてきました。し



常設展示中の日本最大級の気仙沼大島産アンモノイド化石

かし本研究で得られたジルコン年代により、約 1 億 3490 万 (± 65 万) 年前のものであることが分かり、前期白亜紀のバランジニアン期前期にあたるということが明らかになりました。これは、従来の見解を見直す重要な発見です。

【論文情報】

Takumi Otsubo, Reishi Takashima, Taiga Tomaru, Masayuki Ehiro, Toshiro Yamanaka, Yuji Orihashi, Yoshihiro Asahara, Azumi Kuroyanagi, Hiroshi Nishi, Brad S. Singer, 2026. Integrated stratigraphy of the Lower

Cretaceous (Berriasian-Valanginian-Hauterivian) successions in Northwest Panthalassa, Northeast Japan. *Cretaceous Research*, 106411. <https://doi.org/10.1016/j.cretres.2026.106411>

(文＝高嶋礼詩／写真＝小川知幸)

NHK ラジオ 子ども科学電話相談「ここがイチオシ！」でリポーターのあおいさんが当館を紹介しました

2026 年 1 月 18 日 (日) 午前 11 時より放送された NHK ラジオ「子ども科学電話相談」の特別企画「ここがイチオシ！」では、宮城県の小学 5 年生あおいさんが「子どもリポーター」として高嶋礼詩館長とともに弊館の標本や展示を紹介してくれました。

ラジオは音声だけなので、あおいさんは実際の展示を見ながら、そのつど標本の大きさや形などをなるべく言葉にするよう心がけてくれたようでした。たとえばフクイラプトル全身骨格レプリカでは、高嶋館長が「ティラノサウルスに似ているけれどもかなり小型で」などと説明すると、あおいさんは、鋭い歯や前脚のかぎ爪が印象深いことにも触れ、また、ウタツギヨリュウでは、その形を「ヒレが付いていて、口が細長く、尾ビレもある」と説明してくれました。それをうけて高嶋館長が「復元すると大きさが 3 ～ 4 メートルあります」と解説し、さら

に微化石・有孔虫では、高嶋館長が、顕微鏡のモニターに小さな丸い形が何個か映っていますと説明すると、「それぞれに学名が付いているんですか?」と質問するなど、展示を紹介するうちに、だんだんと発想が研究者のそれに近づいてきたようでした。

本物の標本と向き合い、その特徴を

即座に言葉にする経験は、ラジオに臨場感をもたらすだけでなく、研究の基礎を養うことにもつながります。あおいさんは、今回のリポーター体験をつうじて「恐竜や古生物への関心が高まりました」「将来は恐竜学者や古生物学者になってみたい」と語っていました。

(文／写真＝小川知幸)



ウタツギヨリュウの展示の前で収録に臨むリポーターのあおいさんと高嶋館長

新任スタッフ自己紹介



東北大学総合学術
博物館技術補佐員

細萱 航平

(ほそがやこうへい)

PROFILE

1992 年生まれ

専門：彫刻、地球史

今年度 4 月より、技術補佐員として東北大学総合学術博物館にて勤務し

ております。歴史ある東北大学が長い時間をかけて保存・分析してきた多様な資料を引き続き守りつつ、より広く後世に伝えていく過程に携われることを嬉しく思っています。実務では、展示業務のほかに、館内の実験装置の管理などを中心に担当いたします。どうぞよろしく願いいたします。

私自身は、彫刻と地球史を専門にしています。勤務前の 2023 年には、博物館と協力して、川内地域の地質を美

術の手法を取り入れて紹介する展示を試みたことがあります (編注: 2023 年 12 月発行の本紙 No. 69 に記事を掲載)。また、別のミュージアムで教育活動にかかわった経験もあります。そのような経験を活かしながら、総合学術博物館のさらなる魅力発信に努めていければと思っています。

白亜紀末の小惑星衝突を示す K/Pg 境界層の一部を北海道で発見～東アジア・北西太平洋域で初～

約 6600 万年前、現在のメキシコ・ユカタン半島付近に小惑星が衝突し、恐竜やアンモナイトをはじめとする多くの生物が絶滅しました。この出来事は中生代白亜紀と、新生代古第三紀の境界を画するもので、その時代境界は「白亜紀／古第三紀境界（K/Pg 境界）」と呼称されます。

高嶋館長を筆頭に東北大学と東京大学を中心とする研究グループは、このたび北海道東部の根室層群から、この小惑星衝突の痕跡を記録した K/Pg 境界層の一部を発見しました（図 1）。本成果は、東アジア・北西太平洋域において初めて地球化学的証拠によって K/Pg 境界層を確認したもので、2026 年 5 月に国際学術誌 *Communications Earth & Environment* に掲載されました。

K/Pg 境界層は世界各地で知られていますが、東アジア・北西太平洋域では信頼できる記録がほとんど見つかっていませんでした。この地域は小惑星衝突地点から最も遠い場所の一つであり、地球規模の環境変動がどのように伝わったのかを検証する上で重要な地域と考えられていました。北海道浦幌町の根室層群では、1980 年代に茂川流布（もかわるっぶ）川沿いの粘土層が K/Pg 境界層であると報告されていま

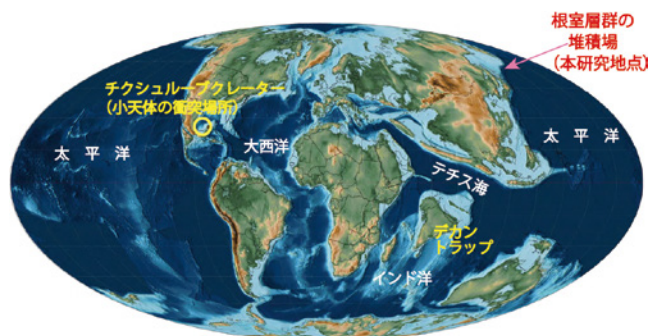


図 1 白亜紀末期の古地理図。本研究地点は小惑星の衝突地点から最も遠い場所の一つ (Scotese (2014) の古地理図に加筆)

したが、その判断は微化石の産出状況にもとづくもので、境界層認定の決め手となる地球化学的な検証はおこなわれていませんでした。研究グループは 2013 年から継続的な調査を進め、従来の「境界層」は、断層によって破碎された地層であり小惑星衝突の証拠を示さないことを明らかにする一方で、その地点から北東約 4 km に位置する川流布（かわるっぶ）川支流上流の泥岩層から、衝突の痕跡を示す地層を発見しました（図 2）。

今回の研究で重要な役割を果たしたのが、白金族元素の一種であるオスミウム（Os）の同位体分析です。オスミウムは地球表層にはわずかしき存在しませんが、小惑星には比較的多く含まれているため、小惑星由来物質が

地球表層に供給されると、堆積物中のオスミウム同位体比が特徴的に変化します。研究チームは、今回発見した泥岩層で、オスミウム同位体比の急激な変動とイリジウム濃度の増加を確認し、これに微化石分析・古地磁気分析・火山灰の放射年代測定を組み合わせ、この地層が K/Pg 境界層に相当することを示しました。

今回発見された地層には、小規模な断層の影響により衝突直後の一部の記録が失われている可能性があります。小惑星衝突の化学的痕跡は明瞭に保存されています。さらに、この地層は世界の多くの K/Pg 境界層に比べて堆積速度が速く、100 年単位という高い時間分解能で当時の環境変動を解析できる可能性があります。今後周辺地域で、より連続的な地層が発見されれば、小惑星衝突後の気候変動や生態系の崩壊・回復過程を、より詳細に解明できるでしょう。また、この地層の上下で微化石解析や有機・無機元素分析を進めることで、東アジア・北西太平洋域における白亜紀末の陸上気候、海洋環境、陸上・海洋生態系への影響をより詳細に復元できると期待されます。

今回の成果は、東アジア・北西太平洋域における研究の重要な一歩であり、白亜紀末の環境変動を解明する新たな基盤となるはずで

（プレスリリースをもとに再構成＝小川知幸／資料提供＝高嶋礼詩）

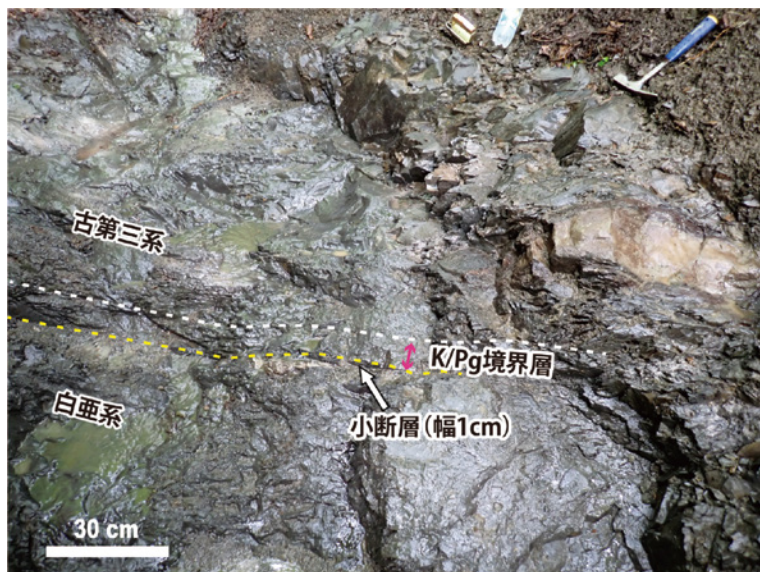


図 2 今回発見した K/Pg 境界層の露頭

ウタツギョリュウが藤崎の東北 ROUTE45「潮騒マルシェ」に登場しました

2026 年 4 月 30 日から 5 月 6 日まで仙台市の藤崎百貨店本館 1 階ステージ F で開催された東北 ROUTE45「潮騒マルシェ」の一面に南三陸産の化石が登場しました。このイベントは国道 45 号線でつながる東北の港町をめぐる地域共創プロジェクト企画で、本年はその 2 回目として南三陸町と気仙沼市の物産や見どころを紹介したものです。気仙沼のホヤぼーや・南三陸町のオクトパス君などの人気者もやって来ましたが、地域の特産品の紹介・販売コーナーに加えて、総合学術博物館が協力した南三陸産の三疊紀化石の展示コーナーもつくられました。

南三陸地域は、1881 年にわが国で

初めての三疊紀化石（貝化石モノティス）が報告された場所で、1970 年には当時世界最古の魚竜化石（国指定天然記念物）も発掘されています。また、近年もわが国初、わが国最古、世界最古などの多様な化石の発見が相次いでいて、「化石の町 南三陸」として全国に知られています。そこで、地元の特産品などの紹介に加え、約 2 億 5000 万年前の太古の海に君臨した、世界最古級の魚竜化石「ウタツギョリュウ」、それと共産するアンモノイド・のうとう類・腕足動物類およびモノティス化石を、地域を代表する化石として展示しました。

ステージ F の周辺は装飾品などきら

びやかな売場が並んでいて、化石の展示は少し雰囲気違ったものでしたが、通りがかった多くの方が化石を眺め、ギョリュウの解説パネルを熱心に読まれていました。また、「さわれる化石」として展示されていたモノティス化石には、お子さんがそっと触れられていたようです。

会期中には、昨年の南三陸での魚竜化石天然記念物国指定 50 周年の企画展にさいして総合学術博物館が作成した魚竜クリアファイル 250 冊もお土産として置いておきましたが、初日にたちまち 100 冊が捌け、2 日目からは小出しにしなければならなくなりました。

（文＝永広昌之／写真提供＝藤崎）



東北 ROUTE45「潮騒マルシェ」の南三陸の化石コーナー



化石コーナーに展示された標本類の一部

仙台城二の丸から大学へ 歴史の記憶をたどる「東北大学川内南キャンパス周辺おさんぽマップ」

東北大学川内南キャンパスとその周辺の歴史スポットを巡る「おさんぽマップ」(A4 版)を作成しました。現在は文系の学生たちが行き交うこの地は、仙台城二の丸から陸軍第二師団、米軍キャンプ、そして東北帝国大学・東北大学へと、時代とともにその姿かたちを変えながら活用されてきた歴史豊かな土地です。

マップでは、仙台城の石垣や櫓といった有名な遺構から、米軍キャンプ時代の消火栓など、普段キャンパスを利用している方でも何気なく通り過ぎてしまうようなスポットまで、往時の痕跡を留める各地点を丁寧に解説しています。ま

た、40 分程度で一周できる手軽な散策モデルルートも紹介しています。キャンパスの風景のなかにひっそりと息づく奥深い歴史を肌で感じてみてはいかがでしょうか。

マップは弊館のほか本学附属図書館本館、青葉山公園仙臺緑彩館で配布しています。PDF 版は本学学術資源研究公開センターのホームページからダウンロードできますので、遠方の方もぜひご活用

ください。

（文／写真＝小出遥香）



東北大学川内南キャンパス周辺おさんぽマップ

東北大学総合学術博物館 Information



石巻市博物館の企画展「石巻化石トラベラー」に協力します

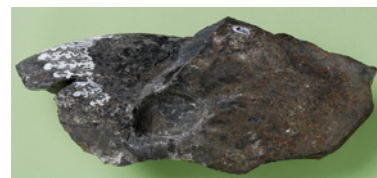
石巻市博物館の令和8年度第16回企画展「石巻化石トラベラー—太古の海をめぐる—」が、令和8年(2026)8月1日(土)から10月18日(日)まで、石巻市博物館企画展示室において開催されます。

石巻の自然環境と“恐竜”コンテンツを結びつけ、楽しみながら地域の歴史・文化への理解を深めることができる企画展で、大型化石標本を中心に展示され、体験型展示も設けられます。

また、石巻市産の魚竜化石(*Utatsusaurus*)やアンモノイドなど、

地元の化石を紹介するコーナーも設置される予定です。当館もこの展示に協力し、当館所蔵のオーラコセラス(*Miyagiteuthis*)、アンモノイド(*Timorites*、*Hollandites*、*Ussurites*、*Choffatia*、*Busnardoites*等)および囊頭類拡大復元模型など、石巻市を中心とする南三陸地域のペルム紀～白亜紀化石を出品します。

お問い合わせは、石巻市博物館(宮城県石巻市開成1-8 マルホンまきあーとテラス 電話 0225-98-4831 ファクス 0225-98-4832)までお願いいたします。



石巻市雄勝町産ペルム紀アンモノイド
Timorites (長径 25 cm)



石巻市井内産三畳紀アンモノイド
Hollandites (長径 20 cm)

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*
お盆時期の数日*2、年末年始*2
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。

*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



総合学術博物館の ホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<https://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum

Omnividens

【オムニヴィデンス】

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

■仙台市地下鉄

仙台市地下鉄東西線「青葉山駅」で下車(仙台駅より乗車時間9分)。「青葉山駅」北1出口より徒歩3分。

■仙台市観光シールバス「るーぶる仙台」

JR仙台駅西口バスプールより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約30分。

■自家用車

東北自動車道仙台宮城インターチェンジより仙台市街方面へ向かい、青葉山トンネルを仙台城方面に出て、右折2回、大橋経由。駐車場あり。